



筑紫女学園大学リポジット

外国語学習と身体表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, テーマ, 宇佐美, 陽一, NAKAMURA, Tamah, USAMI, Yoichi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/202

外国語学習と身体表現

中 村 テーマ・宇佐美 陽 一

Foreign Language Learning and Embodied Expression

Tamah NAKAMURA and Yoichi USAMI

はじめに

言語と身体との関係はコミュニケーションの分野においても研究されてきたが、実際の外国語教育においては意味を表出する言語とジェスチャーという形での身体の一部を用いた表現としてしか学習されてこなかった。このこと自体は外国語学習の重要な側面であることに違いないが、言語学習をより効果的に促進するためには、意味表出手段としての身体全体と言語学習とを体系的に関連づける必要がある。

そのために、本稿では、外国語学習、特に英語教育を念頭に置き、日本でも「シュタイナー教育」として知られるようになったルドルフ・シュタイナーが提唱したオイリュトミー⁽¹⁾の考え方も積極的に取り入れることで、ことばや音とともに自然と開いて、自分自身の感覚を楽しみながら外国語学習を実践することを提唱したい。

「楽しみながら外国語学習を実践する」とは、より具体的に述べると、以下のように要約できる。

- 1) 学習者は、外国語学習を体感でき、確実に語学力が向上していることを実感できる。
- 2) 「学習が単なる暗記作業に終始している」というような従来の批判を受けることがなくなり、学習者は即実践可能な語学力を着実に身につけることができる。
- 3) 上記の点が実感できるので、学習者の外国語学習への目的意識や動機がより明白になるとともに、自学自習へより積極的に取り組む姿勢が芽生え、結果的に外国語能力の向上を促すことになる。
- 4) さらに身体的な仕草・動作や感覚が伴う学習によって得た外国語能力は実践の現場で大きな力を発揮する。

1. ワークショップ 《はなの橋》

1) 日 時：2010（平成22）年5月22日 15：30～17：30

2) 場 所：九州大学留学生センター国際ホール

3) 参加者：九州大学留学生5名 崇城大学学生5名

4) ワークショップの準備

ワークショップ当日までに、九州大学留学生センター、崇城大学の
各クラスで以下のような準備をおこなう。

九州大学留学生センター現代パフォーマンスアートクラス

○ 英訳されたテキストに部分的に日本語を織り交ぜながら朗読の練習

○ 色付きジョーゼットを体に巻く

崇城大学芸術学部デザイン学科パフォーマンスアート実習クラス

○ 日本語のオリジナルテキストをしぐさと空間移動にドラマ性のある朗読を乗せて
演じる練習

○ 新聞紙で役の面と髪被り物を造形

5) ワークショップの展開

使用テキスト⁽²⁾

《はなの橋》原作 [花さき山]：斉藤隆介 テキスト：鍋島幹夫作 脚色：宇佐美陽一

(しぐさ)

(ことば)

寝転がる sleeping position curled on side

頭のみ上げる only head up

ゆっくり起き上がる slowly stand up

仁王立ち stand straight up

ゆっくり首を右上に turn head slowly to right

ゆっくり首を左へ turn head slowly to left

体を縮める contract body into ball

立ち位置を拡げる extend out into the group

ゆっくり手を拡げる extend hands slowly

ゆっくり手を握って降ろす slowly bring hands into a fist

立ち位置を縮めて集る slowly stoop down in group

ひとは孤独を知ったとき

頭につのがはえる キバがのびる

髪は逆巻き 目は燃える

孤独という

名づけようもない不思議な風を感じ

計りようのない遠い距離を感じるは

ただ ふるえ ふるえるものすべての存在を知る

ほおーい ほおーい

燃える目は世界の炎を映し

逆巻く髪は 逆流する時間をおよぐ

ほおーい ほおーい

英訳

Those who know solitude,
Horns grow on their heads
They grow tusks!
Their hair stands on end, their eyes glow!
Solitude! Solitude! Is an un-nameable, wonderful....wonderful
Wonderful wind!
Endless!
The child senses the distance infinitely far
And simply trembles.
And the child perceives the nature of all creatures that tremble.
Ho-i, Ho-i
The glowing eyes reflect the flames of the world
The hair, standing on end, swims in time flowing backwards
Ho-i, ho-i,

手順

a. 楽器の紹介

磐笛、両端開口笛（骨製、竹製）、鳥笛（バードウォッチング用）、竹フルート、自家製クラブス（柿）

b. 自己紹介

英語と日本語で中村テーマの通訳を交えてウォーミングアップ

c. 合同演技部分の説明と解説

声（voice）をイメージの体（body of image）として、仕草（movement）を背景／舞台（background/stage）として、参加者各々の内的なイメージを形成して個的な「インナーシアター」を参加者がワークショップ体験と同時進行で内的に上演していくことを目的として解説した。

ここでの説明・解説における声とは共鳴体としての体（body）とそのまわりの空気（atmosphere）、及び空間（space）を二次的な共鳴体とした音響現象と各言語の持つ歴史的、民族的基盤による意味内容のふたつを柱とした人間学的見地から定義している。仕草も同義的に捉えることによって初めて声との共振／共時的な営為となると考えている。また解説の便宜上声としぐさに分けている人間の営為も実際は分け難い総体として明らかにしていきたいことを参加者に伝えた。

- d. テキスト内のひとつの言葉「ほおーい ほおーい」を三つの違う発語として朗唱し、それを聴いて形成されていく各自のイメージのとおり動く。これは体のウォーミングアップも兼ねていた。



低く太い声

甲高い声

同左

- e. テキストを稽古する。留学生 5 名は日本語の力がまだ弱く漢字も読めない学生がいるので、一行一行を宇佐美陽一の後継学生が続く形で何度か朗唱をした。

- f. 風 (wind) を取り上げて、音韻と意味の両面から言葉を考えてみた。日本語の「風」の音韻に風の物理的特性はあまり感じられないが、英語の wind は明らかに *w* の揺れる動きが *i* によってより前進させられ、*nd* によってさらに先へと流れていき、風が吹いていく様子をこの音韻が表現している。オイリュトミー的な手法として wind と声を出しながら大きく体を動かしていった。

- g. 上記テキスト左の (しぐさ) の指示に従い、テキストを朗唱しながら動く稽古に入る。できるだけシンプルな動きを、テキストの音韻から観えてくる身体の造形力 (内造形力) とテキストの意味性から考案したことが功を奏して、学生たちはとても素直に動き始めた。2 時間のワークショップで時間的余裕があまりなかったため、前半は参加者たちがテキストを体感できることを最優先した。

- h. ワークショップの後半は、各授業で準備して来たパフォーマンスの部分とワークショップの前半で稽古した部分を連続して練習した。宇佐美陽一の授業では学生 2 名が古新聞に彩色す



「山ンば」に扮して演技



ジョーゼットを纏って演技

る方法で被り物を制作し、木の杖と青色の綿布を肩掛けにして、学生二人が「山ンば」に扮した。いわゆる具体性の高い演出となった。稽古量は約3時間と少なかったがセリフも覚えてしまい、稚拙ながらも演技ができた。

九州大学留学生センターの学生5名は中村テーマも加わり、上記の写真からもわかるように、ジョーゼット生地を肩からまとして朗読中心の演技をおこなった。ある程度の日本語能力はあるとは言え、長い日本語のテキストを覚えるのに苦労したことは容易に想像できる。むろんアクセントや文章の抑揚など、難しい部分までは踏み込めなかったが、短時間でここまでアメリカ、ロシア、シンガポール、フランスからの留学生たちがパフォーマンスを仕上げたことは驚きであった。

6) 参加者たちの感想・内省

ワークショップで使用したテキストは斎藤隆介原作の「花さき山」で、オイリュトミースタジオ・ルラの委嘱によりH氏賞受賞詩人の鍋島幹夫氏が舞台台本として創作したものである。この頃はニューヨークでの「9.11.」の後であり、大きな影響を受けた詩的な作品となった。

その作品をさらに、オランダ・デンハーグ市での国際オイリュトミーフスティバルでの初演（2005年）のために宇佐美陽一が大幅な脚色を加えて演出したものである。こうした経過の中で、ある意味鍛えられてきたテキストが小規模ながらも、今回のワークショップで再び多言語の中に転がっていったことになる。

では、どんな発見があったのだろうか。以下に参加者、特に留学生たちの声を紹介しておきたい。その上で、彼らがワークショップをとおして何を感じとったのか考えることにする。なお、彼らの感想等は英語で書かれていたので、簡単な日本語訳もつけておいた。

Movement as Unifying （グループを融合させる動き）

Everyone else seemed nervous and moving together made them feel less nervous and more comfortable. One student said, the initial “*silence and awkwardness soon turned into a comfortable space as we all became surrounded by the sound workshop*”.

みんな最初は神経過敏になっているようだったが、一緒に動くことでだんだんそれがなくなり、お互いに心地よく感じるようになった。一人の留学生が次のように言った。最初に感じた沈黙と居心地の悪さは、みんながワークショップの音に包まれていくことですぐに心地良い空間へと変わって行った。

Words as Sounds (sound-words) (音と言葉)

They had been trying to understand the ‘meaning’ of the words in the entire poem in a linear way. One student said she realized the purpose of the workshop was “*to fully express through sound and movement*”. Although we had read the poem many times in class, and practiced with loudness, taking parts, warming up our bodies, the workshop was the first time that they actually moved to and with sounds, and the sounds of the words. From this workshop I realized that 1) Changing tone of voice (loudness/quality) = changes (influences/controls) body movements and, 2) Words may have the quality of the images they portray. If they don’t it is hard to match voice and word. Putting movement “instructions” beside each line helps non-movers (participants not used to expression through movement) to create a movement image (imagine as they move and voice the words).

留学生たちは詩全体の言葉の意味を直線的に理解しようとしていた。一人の女子学生が言ったこのワークショップの目的は「音と動きを通してできる限りのことを表現すること」なんだ、と。教室で何度も大きな声を出しながら練習をし、体のウォーミングアップをしたけれど、ワークショップで初めて彼らは実際に音に合わせてそして音とともに動いたのである。このワークショップを通して、以下のようなことに気付いた。1) 声の大きさ、声の質を変えることで体の動きにも影響が出る。2) 言葉は彼らが描くイメージの質を内包している。そうでなければ、声と言語を一致させることはできない。詩の各行に動きに関する指示を書き加えることで、動きを通して表現することに慣れていない参加者たちが動きながらことばを発する際のイメージの創出を手助けできたと考える。

People in contemporary society are focused on the ‘visual’ as much of our life is filled with media images. One student commented that she “*had forgotten the importance of sound and space*” but she was reminded of it when she experienced how the sound-word HOI when voiced differently “*could really make a difference to the mood and atmosphere of the location and the people in the space itself*”.

現代の人々はメディアを通してのイメージに囲まれており、視覚的なものに集中する傾向がある。一人の女子留学生在が次のようなことを言った「私たちは音と空間の重要性を忘れてしまった。でも、ほーい という言葉が違った形で発音されたとき、場の雰囲気と空間、そしてその空間にいる人々に対してどれだけ大きな違いを産み出すかということに気付いた。」

Connecting in Space; sensing atmosphere; accepting ambiguity and chaos

(空間を紡ぐ、雰囲気を感じる、あいまいさと混沌を受け入れる)

In the final comments at the end of the workshop, Japanese students commented on the atmosphere ‘fun-iki’ in the space/room; their feelings; how their interactions and re-lationships

with the other participants changed from beginning to end.

ワークショップの最後に、日本人学生たちは場の雰囲気についてコメントをした。ワークショップの最初から終わりまでの過程の中で、いかに他の参加者たちとのやりとりや関係が変化していったかについて感想を述べた。

Non-Japanese students (Russia, Singapore, USA) commented on the details of the performance; how adding more sound and lighting would change the performance; how wearing costumes created a comfort level; wondering how the performance would be if it were in one genre (all western-oriented, or all Japanese style).

ロシア、シンガポール、アメリカからの留学生たちは、パフォーマンスの詳細にわたってコメントをした。音や照明がいかにパフォーマンスに影響をあたえたか、コスチュームをつけることでいかに落ち着いた気分になったか、もし、パフォーマンスが西洋のスタイル、もしくは東洋的スタイルのどちらかに偏っていたら、結果としてどうなっていたか等。

One student commented that the way the performance was created was uniquely Japanese and that she experienced “*a kind of peace and harmony, even in the chaos*”. She felt that in her home country of Singapore the same improvisation exercise would have resulted in more chaos.

一人の女子留学生がコメントした。「パフォーマンスが創造されていった過程は極めて日本的だった。その結果、混沌の中にあっても、ある種の安らぎと調和を経験することができた。」彼女は同じ即興のパフォーマンスがシンガポールでおこなわれていたら、もっと混沌とした結果に終わっていただろうと感じたようだった。

Therefore, one of the biggest realizations I got from this workshop is that “*voice is the image's shape or body; and movement is the background or stage*”. Instead of discussing the meaning of the poem and the poem's structure from the beginning of the class, I will use voice and movement together. The ‘meaning’ of the poem will emerge in this approach. Because students will learn to experience and develop a tolerance for ambiguity, and a sense of creating the atmosphere. By participating in a workshop with Japanese students, the international students benefit more than from what I can ‘teach’ them in class because they can experience the non-linear improvisation and producing a performance together.

このワークショップで感じた事は、声はイメージの形、体であり、動きは背景、ステージである。詩の意味や構造を最初に話し合うのではなく、次は、声と動きを一緒に用いることから始めようと思う。このやり方のほうが、詩の意味が湧きあがってくると思うからである。留学生たちはあいまいさに対する寛容性や雰囲気を創り出す感覚を体験できるからである。日本人学生たちと一

緒にワークショップに参加することで、留学生たちは私が教室で彼らに教える事ができる以上のものを得る事が出来るはずである。なぜなら、彼らは非直線的な即興と一緒にパフォーマンスを創り出すということを体験できるからである。

日本人学生たちに共通していたのは、「最初はなかなか入れなかったけれど、動いているうちに次第にうち解けていくことができ、心地よく感じる事ができた」ということであった。ワークショップを通して、留学生たちと日本人学生たちが、程度の差はあっても同じ体感を共有する時間と空間を持つことができたという点は非常に明白である。それが身体表現を用いる場合の大きな利点であろう。

このワークショップで試みたように、ひとつの日本語のテキストを多言語の身体性によって検証することで、「言語の身体性」の普遍性を探索していくことになる。学生たちの声でのそれぞれの表現は違うのだが、体験から結果的には身体性の体感を得ているように思う。

言語には大きく二つに分けられる身体性がある。すなわち、イメージと響きの身体性である。前者はオペラを含んだ演劇の中で表現されてきたミーミック（表情）とドラマティックな身体性である。後者は音楽と詩的表現（短歌・俳句、詩、一部の小説）中で表現されてきたリズムと雰囲気も含めたハーモニーの身体性と言える。

今回のワークショップは主に後者の音楽的身体性に関わっているが、前者の演劇的身体性には言語の民族性がより深く関わっているように思う。これらの関係を明らかにしていくことは今後の課題である。

2. ワークショップ 《音・リズム・ことば》

- 1) 日 時：2010年（平成22）10月30日 14：00～16：00
- 2) 場 所：崇城大学芸術学部アートクリエイションスタジオ
- 3) 参加者：九州大学留学生2名 崇城大学学生3名
清島靖彦（写真家：ワークショップ撮影のため）
- 4) ワークショップの展開

手順

- a. 九州大学留学生センター現代アートパフォーマンスクラスの留学生2名、崇城大学芸術学部デザイン学科パフォーマンスアート実習クラス学生3名、清島靖彦氏らが会場に到着。中村テーマと宇佐美陽一も合流。
- b. 自己紹介
全員輪になって、自分の名前（first name）を言いながら、一步輪の中に踏み込んで自分の

気持ちをジェスチャーで表現。

- c. ウォーミングアップ（15分間）[developing intuition 一空気を読む]

輪になって手を低いところから低い声で始めて、だんだんと高くしていく。

やがて直感（intuition）で「ちょうどいい！」ところを感じたら、すぐに一歩輪の中に入って手をたたく



- d. 英語の歌に動作をつけて歌うことに挑戦（Beall & Nipp; 1997, 2002）。初対面の学生たちも少しほぐれてきた（「しあわせなら手をたたこう」など）。遊びの歌は世界中にあるが、共通のメロディーで歌詞の違うものにも気がつき、英語と日本語（ぐうちょきばあ）も試す。中国にもあることが判明。

- e. 「はないちもんめ」（日本のこどもの伝承遊びのひとつ）に全員で挑戦。地域によって若干違いがあるが、ワークショップでは、以下のように唄った。

勝って嬉しいはないちもんめ
負けて悔しいはないちもんめ
あの子が欲しい
あの子じゃわからん
〇〇ちゃんが欲しい
x x ちゃんが欲しい
最初はぐ〜 じゃんけんぽん！



- f. 次に、中国の「ひよこと鷹」に全員で挑戦。同じ遊びがアメリカでは「ひよこと狐」としてある。
- g. 休憩をとる。その間、お菓子を食べながら、お互いの国のこどもの遊びについて語った。
- h. 休憩後、フィリピンの「路地遊び」に全員で挑戦。走る遊びがとても面白い。
- i. 最後に、ワークショップ全体の印象や掴んだ内容、新しいアイデアなどを筆記してもらい、それから各々にそのうちの一番大事だと思ったことを発表してもらった。以下にその一部を紹介しておく。日本語訳も簡単につけておく。

Chinese – female (中国人 – 女性)

Similarities in games are the same tune in different countries with different words.

国の違い、言葉のちがいがあっても、遊びにおける類似性を同じ音調に見出すことができる。

Perhaps in eastern cultures obeying rules and trying to cater to others are more important than being outstanding in a group.

規則への従順性や他人への思いやりは、東洋の文化においては、集団から抜きでることよりも重要である。

Filipino – male (フィリッピン人 – 男性)

Games use music, chants and rhythmic songs in order to foster a climate of excitement and cooperation among players. It gives the game a sense of being more than just a win-lose activity – it becomes an enjoyable activity.

ゲーム（遊び）はやっている当人たちを高揚させたり、彼らの間での協調性を養うために、音楽、詠唱、リズムカルな歌を利用する。ゲームは単なる勝ち負けの実感をあたえるだけのものではない。ゲーム（遊び）は楽しい活動になるのである。

Physical activity is almost always present. The act of holding hands makes you think you are 'one' and a collective in winning the game – even if you hardly know each other.

身体的活動はほとんどの場合存在する。お互いの手を取りあうという行為はゲームに勝つ中で、一体感を与えてくれる。たとえ、お互いのことをよく知らない場合でも。

Being sensitive to how others are acting or about to act enables you to do things out of instinct or intuition.

他人がやっていることややろうとしていることに対して敏感になることで、ものごとを直感的にやることが可能になるのである。

Although the songs we learned as children are taught to us in our native language, it is quite surprising to know that their melody is the same for different countries. But sometimes putting the words to the tempo or rhythm is different.

子供のころに習った歌はそれぞれの母語で教わったのであるが、国こそ異なってもメロディーは同じであることに驚いた。勿論、テンポやリズムに合わせたことばは異なることはあるのだが。

Non-verbal communication is enough to facilitate teamwork. You don't have to agree verbally that you are a team – you just feel it.

チームワークをより円滑なものにするのにノン・バーバルコミュニケーションは十分である。同じチームの一員であることをことばで確認する必要はない。ただ、そのことを感じればよいのだ。

Being interculturally competent requires being aware and sensitive to other cultures' way of behaving and communicating because these things are culturally encoded.

異文化コミュニケーション能力を身につけるには他の文化における行動やコミュニケーション方法に敏感になることが必要である。なぜなら、ものごとは文化的に解釈されるからである。

日本人女子学生 1

全体の空気が最初はまだ固く、ぎこちなさを感じた。みんなの声も小さく、タイミングもばらばらだった。しかし、徐々に慣れてくると、タイミングが合ってきた。タイミングが合ったときの音の気持ちよさは楽しめた。

日本の歌だと思っていたものが、どこの国でも同じメロディーで歌われていたとは思ひもしなかった。共通していることを嬉しく思い、それだけでお互いがぐっと近づけた気がする。

みんなで同じ遊びをしたとき、何が違うとかといったことは全く気にならなかった。「はないちもんめ」で手をつなぎ、ともに声をあげ、勝った時は喜び、負けたときはくやしがり、大きな声で自分の気持ちを表現することができた。同じ人間であること、みんなが1つになり、とてもよい空気が流れたことに感謝した。

日本人女子学生 2

「はないちもんめ」をやって、昔のことを思い出した。なぜ、「はないちもんめ」が好きだったのか思い出せた。グループに入っていくことで、メンバーになり、子供どうしのコミュニケーション

ンが生まれているからだ。いろいろな国で似たような遊びがあることを知ったし、そのことで仲間意識が生まれるのを感じ取ることができた。

日本人女子学生 3

昔は遊ぶ時とても楽しかった。今は外ではしゃいで遊ぶことがないので、今日ひさびさにやって、コミュニケーションは子供にとって遊ぶこと自体がコミュニケーションを深める最良の方法だと思った。全く知らない人、知っている人、知っている人の友達など、みんな寄り集まって1つのことに夢中になっていた子供のころ。子供のころ簡単にコミュニケーションをとっていたことになんだか驚いた。今はコミュニケーションをとる方法を忘れている気がする。

中村テーマ、宇佐美陽一の感想は以下のようなものである。

Tamah Nakamura (女性－アメリカ人)

Words get in the way of communication. Words make us hesitate and unsure. They make us misunderstand. We all can act/ behave well together; we can ‘move’ together.

ことばは時としてコミュニケーションの邪魔になる。ことばは私たちを躊躇させたり、私たちの確信を揺るがしたりする。ことばは、私たちを誤解へと導く。私たちはみんなでより良く行動したりできるし、一緒に動く事ができる。

The ‘games’ we play as children socialize us to communicate with others in our society. But do they socialize us to communicate with other cultures? Today I noticed the following:

子供のころにやったゲームはお互いが社会生活の中でコミュニケーションできるようにしてくれる。でも、異文化とコミュニケーションできるようにしてくれるだろうか。今日のワークショップで以下のようなことに気づいた。

1. Many of the games had similar purposes: ゲーム（遊び）の多くは似たような目的を持っている。
 - － verbal repetition (sometimes with no meaning – just sounds) ことばの繰り返し（ときには意味のないもので、単なる音だけにすぎない）
 - － action repetition 動きの繰り返し
 - － making teams (opposition) チームを作る（反対派も作る）
 - － creating rules to make winning and losing teams 勝ち負けのためのルールを創り出す
 - － learning to lose; learning to try harder 負けることを学ぶ；もっと頑張ることを学ぶ
 - － choosing/interchanging members on teams (learning to leave a group and join a new group) チームのメンバーを選んだり、交換したりする（チームを離れたり、新しいチー

ムに入ることを学ぶ)

- holding hands/touching 手を取りあう/触る

2. Many children today do not play these action games (based on different cultural expectations). They play individualized computer games which are universal throughout the world. Yet, today's children are LESS socialized to communicate easily even within their first culture. Therefore, the purpose of children's action and rhythm games is clearly important to help us develop "Communication Movement" behavior.

多くの子供たちは今日においてはアクションゲームをしない(異なった文化的期待にもとづいたゲーム)。子供たちは個人向けのコンピュータゲームをする。そして、その傾向は世界的なものである。現代のこどもたちは自文化の中での社会的コミュニケーションに対してもあまり慣れていない。したがって、動きとことばのゲームはコミュニケーション・ムーブメントを促進する上でもこどもたちにとっては重要なものである。

宇佐美陽一 (男性-日本人)

全体にとっても明るい空気感があって、学生たち(日本人3名、中国人1名、フィリッピン人1名)は終始笑顔を絶やさず、ファシリテーターの中村テーマも安心してワークショップを進められたと思う。人数の少なさがかえって良い方向に働き、最後は芸術学部学生が片言の英語で中国留学生と談笑していたのが印象に残った。私自身の身体表現教育研究にもとても大きな示唆を残してくれた。「こどもの遊び」のシンプルさに改めて感動し、深いコミュニケーション体験はこのように情報や言葉だけによるものではなく、身体性を伴ったところにあることをしっかりと実感できた。

3. 外国語学習への示唆

上記した2回のワークショップをとおしても明らかなように、参加者たちが異口同音に内省していることは、コミュニケーションはことばだけでおこなうものではなく、身体性と融合したところに、本当のコミュニケーションがあるのだということを実感できたということであり、子供のころにはもっと自然にコミュニケーションを図っていたということを改めて思い出したということである。

遊びの中で自由に体を動かしながら、楽しみ、自分を相手に対して開いていくことがより円滑なコミュニケーションに繋がっていくことを実感していたのである。理屈ではなく、それがより自然におこなわれていたという点が重要なのである。

しかし、大人になってからのコミュニケーションは、自分を隠し、ことばに頼りきったものとなってしまった。そのことが結果的には外国語学習においても強い影響をあたえていると言え

る。すなわち、外国語学習がことばの意味にだけ集中され、本来相手に何を伝えたいのか、つまり、ことばによって伝えようとするメッセージの内容に重点が置かれていないことが問題なのである。

何か新しいことを学ぼうとすると、学習者たちは、少なからず不安を抱くものである。自分だけできないのではないだろうか、みんなの前で失敗したらどうしようか、などと考えてしまうのである。それが学習者たちを委縮させ、学習のさまたげになってしまうことは言うまでもない。このことは外国語学習においても当てはまることである。

外国語学習をより効果的なものにするには、学習者自身が学習に伴うさまざまな不安を解消し、自分にもできるという自信をもつことが大事なことである。そのためには、遊びにみられるように、身体性とことばとが一体となった学習方法が必要となる。そうして初めて外国語を学習している、外国語を使ってコミュニケーションをしている、という実感が各学習者の中に湧いてくるのである。

外国語学習へ示唆していることは、外国語学習は単に発音練習を繰り返して単語や文を暗記することではないということである。つまり、オーディオ・リンガル教授法にみられるような、反復練習のみを強調する形では不十分ということである。前述したように、ことばを学ぶということは、イメージ、響き、リズム、雰囲気の調和をはかることを意味する。

おわりに

声とは共鳴体としての体 (body) と、そのまわりの空気 (atmosphere) 及び空間 (space) を共鳴体とした音響現象と各言語の持つ歴史的、民族的基盤による意味内容を二つの柱とするものからなると考えることができる。つまり、コミュニケーションとは声と空気・空間であり、その中に創造される意味内容は歴史的、民族的基盤をもったそれぞれの言語に影響されるものであり、外国語学習とはそれら双方を理解するということである。では、一体どのようにすればその理解が可能となるのか。それは外国語学習にこれまで欠けがちであった身体性（身体表現、感覚など）をどういった形で取り入れていくかがひとつの鍵となることが明らかになってきた。それはまた、前述の言語の二つの柱：音響現象と意味内容を身体表現によって一つにしようとするオイリュトミーを、どのような方法論で外国語学習に取り入れられるかという可能性をさらに追求していく所にある。これらを明らかにしていくことが今後の研究課題ということになる。

注

- (1) オイリュトミー：1912年にルドルフ・シュタイナーにより創始され、リベラル・アーツ（自由七学科）を礎とする音楽的な身体運動芸術。調和の律動エネルギーが動きの基本形とされ、芸術表現として新しい舞台が試みられている。ヴァルドルフ教育（シュタイナー教育）の授業科目や治療分野でも世界中に広がりを見せている。

(2) Hana no hashi [はなの橋]

原作 (original poem) : 花さき山 (Hanasaki Yama) 斉藤隆介 (Saito Ryusuke) ; テキスト
(scriptwriter) : 鍋島幹夫作 (Nabeshima Mikio) ; 英訳 (translator) : 浅田豊 (Asada Yutaka) ;
脚色 (editing) : 宇佐美陽一 (Usami Yoichi)

(本論文は平成22年度筑紫女学園大学・短期大学部特別研究助成費を受けておこなった研究の成果発表を
かねるものです。)

参考文献

Beall, P. and Nipp, S. (1997). *Wee Sing: Children's Songs and Fingerplays*. Price Stern Sloan: New
York.

Beall, P. and Nipp, S. (2002). *Wee Sing: Rhymes, Songs and Lullabies*. Price Stern Sloan: New York.

(なかむら てーま : 英語学科 教授)

(うさみ よういち : 崇城大学 教授)

